

二

次の文章〔A〕は、一九世紀に発行されたイギリスの絵入り風刺週刊誌「パンチ」に掲載された「望遠鏡的博愛」と題する風刺絵を紹介したもので、〔B〕は、そこで紹介されているチャールズ・ディケンズの小説「荒涼館」（一八五二―一八五三年）第四章「望遠鏡的博愛」から抜粋したものです。これらを読み、あとの設問に答えなさい。（一〇〇点）

〔A〕

望遠鏡的博愛（一八六五年三月四日）



TELESCOPIC PHILANTHROPY.

LITTLE LONDON ARAB. "PLEASE 'M, AIN'T WE BLACK ENOUGH TO BE CARED FOR?"

(With Mr. PUNCH'S Compliments to LORD STANLEY.)

望遠鏡をのぞくのは、大英帝国の象徴であるブリタニア(*注)で、当時のイギリスが行っていた、遠くアフリカに向けての救済政策をあらわす。ロンドン、つまり膝ひざもとの浮浪児たちの一人が、母なるブリタニアのローブにしがみついて、訴えている。

ロンドン浮浪児「お願い、かあさん、ぼくたちこんなに黒いのに、まだかまってもらえないの？」

そして左ページに、「あなた自身の黒い肌の子」という関連詩が添えられている。

ぼく、こんなに黒いのに、まだかまってもらえないの？

ぼく黒人の子じゃない、これはほんとう、

でも軍隊や艦隊がかり出され、

宣教師が送り出されるのを見ると、

言いたくなる、ぼくも全身よこれで真つ黒、

あなたがぼくの肌の色を見れば、

アフリカ黒人と思うでしょう、

内側もあまり明るくはないのです。

ぼく黒人ではないけれど、そう見える、

何かならったことといえ、ただ一つ、

お巡りさん見たら、すぐにずらかつて、

へたにつかまるのをさけること。

ぼくたちどこから見ても互いにそっくりで、

どんな理屈があるにしても、

一方が人間できようだいであるならば、

ぼくだって子ども、人の子じゃいけないの？

.....

興味深いのは、ディケンズの『荒涼館』第四章がやはり「望遠鏡的博愛」という題で書かれているということだ。ここに「いつもアフリカを見すえている」よ
うな、ミス・ジェリビーが紹介される。彼女は家事や子どもたちの世話を、いっさいほったらかして、専らアフリカの原住民の救済・教化事業に熱中し
ているのである。『パンチ』は、明らかにこれをパロディ化して、国家レベルでの「望遠鏡的博愛」を描きあらわした。

(*注) ブリタニア：グレート・ブリテンまたは大英帝国を象徴するかぶとをつけ、盾と三叉みつまたのほこを持った女人像。

(出典：松村昌家編『「パンチ」素描集』岩波書店、一九九四年。ただし出題にあたり、一部表記をあらためた。)

〔B〕
第四章 望遠鏡的博愛

ケンジさんの事務所へ着きますと、今晚私たちはミセス・ジェリビーの家に泊るのだとケンジさんはいい、それから私の方を向いて、むろんミセス・ジェリビーをご存知でしょうな、というのでした。

「じつは、わたし知らないのです。たぶん、カーストンさんか——それともクレアさんが——」
しかし、二人もミセス・ジェリビーについてはなにも知りませんでした。

「そう——ですか！」とケンジさんは立ったまま火の方に背中を向け、煖炉だんろの前の敷物を、まるでミセス・ジェリビーの伝記でも読むみたいに、じつと見つめながら、「ミセス・ジェリビーは社会のために一身をささげている、ひじょうにしっかりとしつかりした婦人ですよ。これまでさまざまな時期に、じつにさまざまな種類の社会事業に献身してきましたが、現在では（ただし、なにかほかの事業に興味をひかれるまではですな）アフリカの問題に一身をささげていて、コーヒー——ならびに、土民——の栽培教化全般と、わが国内の過剰人口のアフリカ河川流域への理想的植民とを抱負にしているのです。（中略）」
そういつてケンジさんはネクタイをととのえながら、私たちの方を見ました。（中略）

私たちがミセス・ジェリビーの面前に出た時に、かわいそうに子供たちの一人が大きな音を立てて階段から落ちました——（その音から考えると）頂上から一番下まで落ちたのです。

かわいい子供の頭が一段ごとにドシンドシンと墜落を告げるので——踊り場の音を別にしても七回音が聞えたトリチャードがあとでいいました——私たちは顔に不安の念をあらわさずにはいられませんでしたが、ミセス・ジェリビーはその気配も示さず、平静そのもののようにして私たちを迎えるのでした。四十歳から五十歳のあいだの、とても小柄で肉づきのよい、きれいな人で、その目は美しいけれども、はるか遠いところを眺めているように見える奇妙な癖のある目でした。まるで——またリチャードの言葉を使いますが——アフリカより近いところにあるものはすべて見えないみたいに！

「おいでなさい」とミセス・ジェリビーは感じのよい声でいいました（中略）。

「ねえ、ごらんのとおりに、わたくしは例によって大そういそがしいんです。でも、それはお赦ゆるし下さいますわね。ただ今のところ、アフリカの開発計画に時間を全部とられておりますのです。それで全国の同胞の幸福を熱望している個人や団体と通信をしなければなりません。さいわい計画は順調に進んでおりますわ。来年の今ごろまでには、百五十から二百までの健全な家族を、ニジェル河の左岸でコーヒーの栽培とポリオプーラ・ガアの土民の教育に当あたらせていると思えますわ」

エイダがなにもいわずに私の方を見ましたから、私はそれはさぞかしご満足のことでしょうと思いました。

「ほんとうに満足ですわ。この計画のためには、少ないながらもわたくしのあらんかぎりのエネルギーを捧げなければなりません。でも成功しさえすれば、そんなことなんでもありませんし、それに一日ごとに成功する確信が強くなってゆきますの。ねえ、ミス・サマソン、わたくし、あなたがアフリカのことをお考えにならないなんてふしぎのように思いますのよ」(中略)

「アフリカの問題一般についてのなにか書いたものをごらんになりたいのでしたら、わたくしそのあいだに今口述しかけて——秘書をしておりますうちの長女に口述しかけている手紙の方をかたづけますから——」

テーブルに向っている少女は驚^がペンをかむのをやめて、私たちの会釈に答えましたが、半ばはにかみ、半ばすねている様子でした。

「そうすれば、さしあたりの用事がかたづきますわ」とミス・ジェリビーはにっこりほほえみながら言葉をつづけ、「もつともわたくしの仕事は永久に終^{おわ}るということはありませんけれども。キャディ、どこまでいったかしら？」

「スウォロー様に御自愛專一を折り上げ、また——」とキャディがいました。

「『また』とミス・ジェリビーは口述に移って『アフリカ開発計画に関する御照会状につき申^{もうしあ}上げたたく存じますのは——』いけません、ピーピー！ いけませんたら——」

ピーピー(これは自分で付けた名前でした)といわれたのは階段から落ちたあのかわいいそうな子でしたが、今度は手紙の邪魔をしに、ひたいにパンソウコウをはってあらわれ、けがをしたひざを見せるのでしたが、エイダと私はどちらの方に——きずかそれとも垢^{あか}か——同情したらよいのか迷ってしまいました。ミス・ジェリビーは、なにをいう場合もそうでしたが、あい変^{かわ}らず落着きはらって、「あっちへいつてらっしゃい、ピーピー、お行儀の悪いこと！」とだけいい足すと、またアフリカにその美しい目をそそいでしまうのでした。

けれども、夫人はすぐにまた口述を始めましたし、別に邪魔になるわけでもないのです、私は出てゆこうとするピーピーを思い切つてそつと引きとめ、抱きあげてお守^{まもり}りを始めました。そうされたり、エイダからキスされたりしたので、ピーピーは大そうびっくりした様子でした。しかし、ときどき泣きじゃくるのがだんだん間^{まどお}遠^{とほ}になったと思うと、まもなく腕に抱かれたままぐっすり寝こみ、とうとう静かになりました。ピーピーのことに心を奪われていたために、ミス・ジェリビーの手紙のこまかい点は聞き落^{おと}しましたけれども、全体としてはアフリカがひじょうに重要なこと、それ以外の一切の国や仕事が多^{おほ}く取^とるに足らないことを強く感じさせられましたので、これまでアフリカのことなどほとんど考えてもみなかった自分が、とても恥^はずかしくなりました。

(出典：ディケンズ『荒涼館』青木雄造・小池滋 訳、筑摩書房、一九七五年。ただし出題にあたり、全体の趣旨を損なわない範囲で一部省略し、振り仮名を加えた。また、表記に関しては翻訳原本を尊重した。)

設問一 「A」の傍線部「国家レベルでの『望遠鏡的博愛』」とはどのような意味か、二〇〇字以内で説明しなさい。(三〇点)

設問二 「A」と「B」の内容をふまえて、「望遠鏡的博愛」に関するあなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。(七〇点)